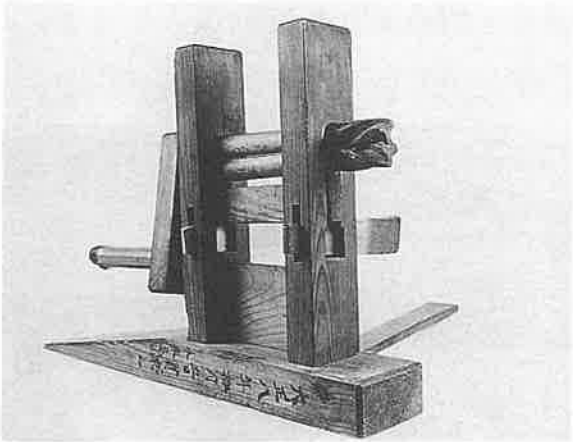
綿から布へ

つみ取られた綿が布に織られるまでの仕事をかつて行われていた手作業の方法で紹介しましょう。

① さねくり

つみ取った綿をさねくりにかけて種を取りのぞきます。この作業をさねくりまたは綿くりといいますが、これに使う道具もまた同じように呼ばれ、できた綿はくり綿といいます。



さ ね く り

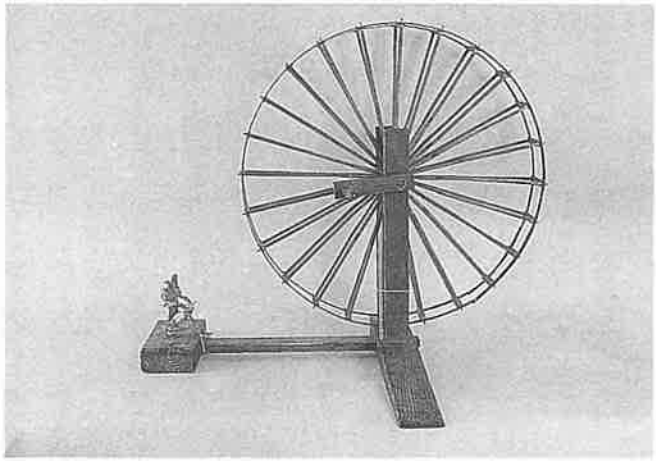
ローラーの間に綿を入れて種を取ります

② 綿打ち

くり綿を綿弓で打って、せんいをほぐし、やわらかくします。綿弓は、弓のように弦の張ってある道具です。この弦に綿をからませて、つちで弦を打って振動させてほぐします。

③ 糸つむぎ

ほぐした綿を糸車を回しながら少しずつ引き出して、糸を作ります。



糸　　車

④ はた織り

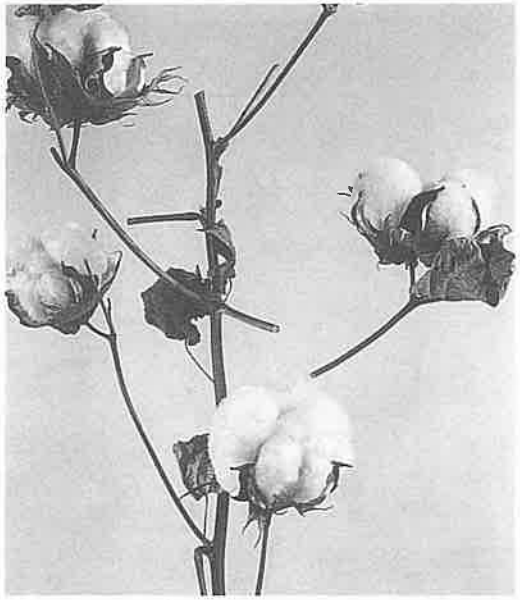
こうしてできた木綿糸をはた織り機で布に織ります。

なお、綿は糸や布のほかにも、ふとん綿や脱脂綿などに用いられ、種からは綿実油という油も取ります。

学習の手引

第14号

綿づくり



綿の実

広島市郷土資料館

〒734-0015
広島市南区宇品御幸二丁目６番20号
☎ (082) ２５３－６７７１

麻から綿へ

わが国では、古くから衣服の材料となる糸や布をつくるために植物の麻が用いられました。かつて糸や布といえば麻のものをさしました。

わが国で綿づくりが初めて行われたのは、今から1,200年くらい前のことで、インドの人によりもたらされた綿の種を植えたと伝えられています。しかし、綿づくりが本格的に行われるようになったのは江戸時代のことでした。

綿は木綿ともよばれます。木綿は、はだざわりがよく、そめやすいので、麻にかわって用いられるようになりました。

綿

広島の綿づくり

広島で綿づくりがいつごろから始まったのかは明らかではありません。しかし、江戸時代の初めには、太田川河口の埋め立て地や海ぞいの村々でかなり広く綿づくりが行われていました。

綿づくりは、その後ますます盛んになり、それにともなって、つみ取った綿の種を取りのぞいたり、糸をつむいだり、布を織ったりする加工の仕事も発展しました。広島でつくられた木綿の布は、よその土地へもたくさん売り出されるようになりました。

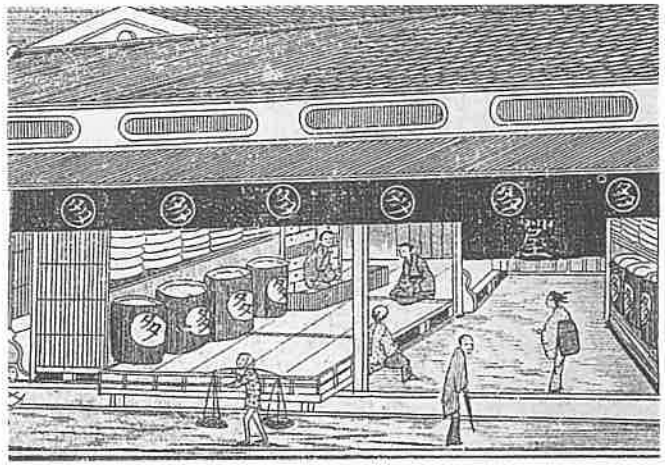
綿　打　ち

『芸備孝義伝』広島市公文書館蔵

広島藩は、綿づくりや加工の仕事を発展させるように手助けをし、取りしまりも行いました。

明治に入っても綿づくりは盛んに行われました。しかし、海外から質がよく、安い綿が輸入されるようになったため、明治の後期からしだいにおとろえていき、昭和の初めにはほとんどみられなくなりました。

なお、明治時代には近代工業を発展させるために、現在の安芸区上瀬野に機械で綿の糸をつむぐ紡績工場がつくられました。また、現在の佐伯区五日市にも紡績工場がつくられ操業を始めました。



明治時代の綿をあつかう店のようす

『広島諸商仕入買物案内記』小谷進氏蔵